



齊良茶家

高田十二景

棟棠鄉至杲山樓宗周選
珍々亭玉川清風藏板

同續十三景并

雜司谷八景
目白十二景

催主

坐滋墨廬
來蘭水夕

特別
5
4939





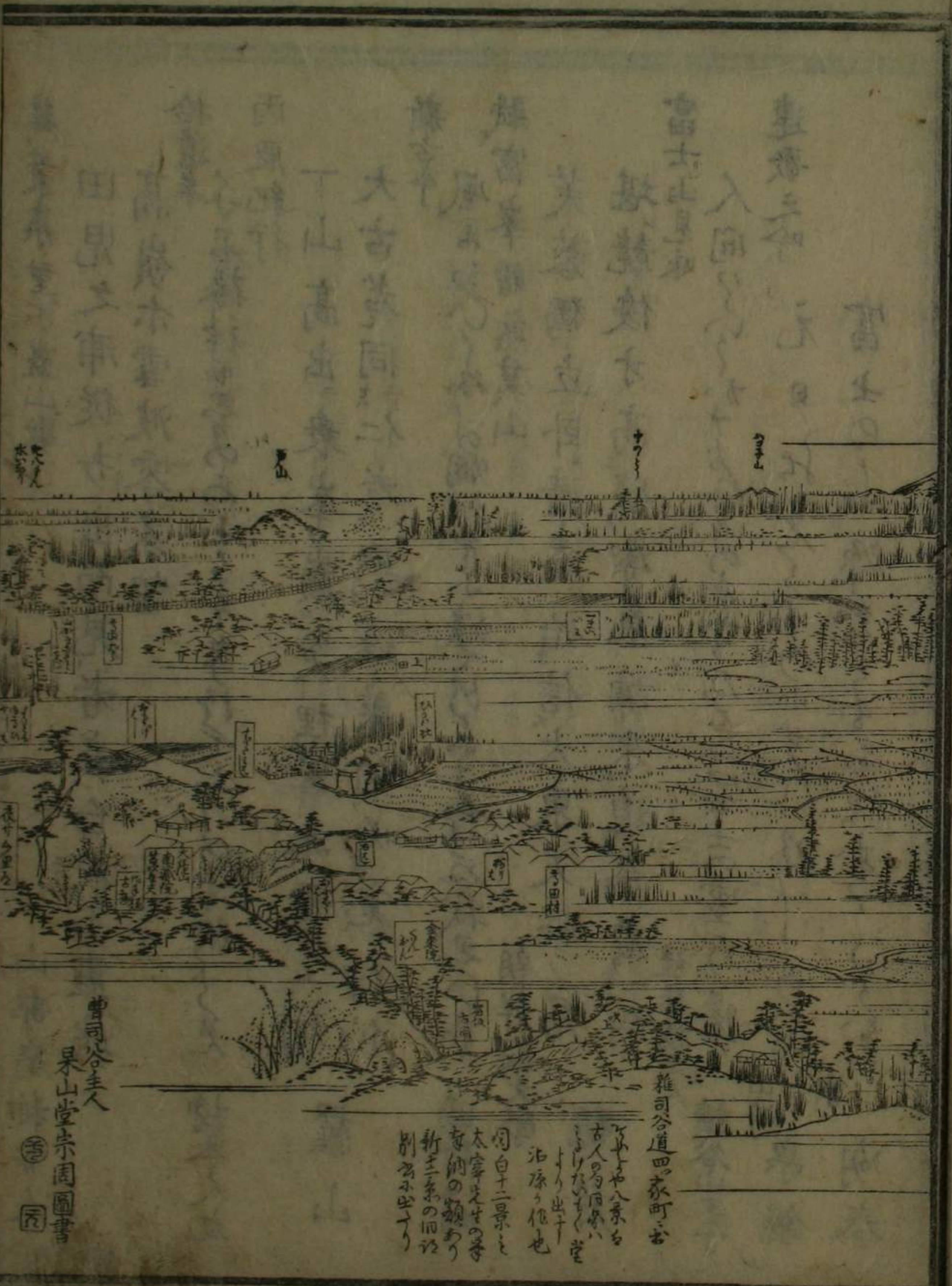
門 5

號 4939

米



高田十三郎
新土堂
玉川寺
茶屋主人
清平茶屋の
入具並に
舟に上り



富士山
入道
大古
下山
田

曹司谷主人
果山堂赤周圖書
雑司谷道四、秋町
白十二景
太宰寺
新三系の
別

萬葉集望不盡山歌

山部宿祢赤人

田兒之浦從抄出而見者真白衣不盡能

高嶺尔雪波零家留

拾遺集

子孫振神也思のあまをて年行てふの山嶺も先 柳本人丸

丙辰紀行

下山高出衆峯山巔炎裡雪氷雲上烟

大古若同仁者樂蓬萊何必覓神仙

羅山

新古今

風ゆるひくゆの烟はるくはるく我思ひは 西行法師

賦富峯贈熊箕山

朝鮮國文學

芙蓉獨立卧清虛始信木東天帝居

瓠月

富士山見咏

琉球國之人

人同くいふかたんそのまゝなふ富士の雪乃曙

讀谷山王字

連歌之吟

元日は此見るもの小せんゆの山

山崎 宗鑑

富士の山師走るもあはれあうさか

京 湖春

朝日富峯之自画讚

富峯ををりて同峯をそりて

神仙乃地之乃のあつりて峯地を後て

天のうらえ日月の爲か雲門を飛ぶく

やうゆ けははるあ

美景の愛を詩人まうとふ

才士文人とて終画す峯と推す

顔始射の山に神人きて

其句は能き

雲霧紛れ皆時

芭蕉翁拙青

百景

巻一 宗鑑



高田十二景

神穴の瑞雲

往古にわがけの馬さそきてお上りし叶辺の家と字を藤原の隠士
大久保周山君の宮座小秘りせしと云はれし里道の石碑が
古人の養育を源て高後世も勝地と傳へるを條に後し加ふ
穴八幡宮の神木光り松なり又觀世古史一世代の徳壽寺の石
松並の池出波の千弁をある

野カ、金藏社小大鞍打者り雲に峯一北枝

守宮の小池

水稲之河の地あり又像大乗のものを長門天々山上安をす
昔は船場船つき松もまじ極め新學の山三月十八日と山用
日4代元

浮城や蝶のちりりかおきてと素園

棟棠の村雨

大田乃薩公の川の道に流るる鳥と松もまじりし松を
とまじり小女山吹の花をりし松もまじりし松を

高田の調馬

鹿瀧馬の調馬代に夜つる場中例年八月十八日甘納やふさ先
式にり此地古極倉久及流流の倉合此地を及ふ千雲り承と傳を

時鳥二聲一ゆかハ出馬の那其角

戸山の長松

伊昔と和田戸山と源頼朝を奥加藤敵陣の初陣籠りし中古
尾湯の馬自なる松又千一夜の夜を字を及ふ松倉もまじりし松を

花をまじり松と志と心むを伝うか嵐雪

玄國の藤蔓

飯沼大時林の法を業を朝臣の思ひの松かまひし松を及ふ松を
別々向の松を及ふ松を及ふ松を及ふ松を及ふ松を及ふ松を及ふ松を

風か〜〜〜静〜〜〜藤花江戶杉風

影橋の原盤

はかみけと義慈の改用原松の松と松の松合より十万松の松と松
松の松下りて松と松の松の松を及ふ松を及ふ松を及ふ松を及ふ松を

法師の源小流も伝りのか〜〜珍夕

大鏡の古梅

茶師と南花院と又八門の松と松の松合より十萬松の松と松
三代の軍師と植の松合より古松の松と松の松を及ふ松を及ふ松を

寺の松や忘〜〜梅の花松盛〜〜本子由

東山の薇蕨

藤のいふと松の松の松合より十萬松の松と松の松を及ふ松を及ふ松を
又藤原の鳥居も松の松の松合より十萬松の松と松の松を及ふ松を

しら〜〜ひや〜〜松二〜〜貞松

芙蓉嶺の雪

秘花抄に十名と松合より十萬松の松と松の松を及ふ松を及ふ松を
新山見出山と上山神路山と介と不二山不盡山富峯と嶺と

あ〜〜も〜〜月〜〜雪〜〜幽也

犀削の明月

は削小松を及ふ松の松合より十萬松の松と松の松を及ふ松を及ふ松を
式を削りし松を及ふ松の松合より十萬松の松と松の松を及ふ松を

名〜〜や〜〜海〜〜山〜〜見〜〜太来

鼠山の白露

右大松家の奥助の飯陣の松合より十萬松の松と松の松を及ふ松を及ふ松を
う松を削りし松を及ふ松の松合より十萬松の松と松の松を及ふ松を

侍〜〜身〜〜松〜〜月〜〜史邦

同續十三景

旗立の古櫻

前十二系古人の住むつる今約舟遊十三系の地を敷く桜は
各々を違ふたれにふらふら小石ふる旧蹟の役廢さへるは情を
續て梓の小手後見の雅君子高勝地の新機を補物引く常もの也
水稲高田は少門堂の存あり。後醍醐帝才の皇子征國乃軍の云々
宗良親王の降陣志と櫻を祀り出でて源の一言又音信山も云々
吾々の毒のら行たりん梓てくひる命ありせと 宗良親王

蕨のすゑ白ふはをしくお志まかり部 宗周
ちるおくくく花の敷らも又新に 果山

山吹の冷泉

言回る湯の山と云徳川村のみ中と云大徳頼朝公奥羽平下向の藤山
和田戸山宗良降陣の地は山吹の井の流す冷き水なりといふ里の湯は
君君んまや云りを在るあふ冷 吐龍

足冷ま踏鳥とくくくくくくくくくく 鬼堂

氷川神燈

日本武の命宗英征伐して武蔵山甲曹と云り武蔵の大元出雲の三社に
まふ故宗子の流を社多しと云社三社日本武の命、橋本の社合和神は

寄るみ神燈やくくくくくくくくくく 盧夕
氷浮く剛や神燈の赤 椿 和山

神靈山の額

難目谷たの宿坂の下合主流也けり下流まで根流の里より小光之橋上
稲あつ社つり水た蓋門々此花咲耶姫と云侍尊の額有納いふ小付

稲神化いの字や國を風光不 元緒

難波津の浪花さきり鳥渡江 柗枝

宿阪の古關

文明の流まそまけ下子木山小陸の關をすきてちりせりやを雲々の家
穿持ますりまきり持使くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

鶯はさくくくくくくくくくくくくくく 坐来

鎗梅や青の宿志おれぬぬ 柗門

一牧岩の鯨

回轉は下に一枚の大岩つて飛龍斗みきき入るる音ハ響小言り
お船小る船の巻も光の月おや小月おむくくくくくくくくくくくく

岩お磨く月に身をすく船汲ん 東里

氷音や口唇りくくくくくくくくくく 義城

大野山の風

難波の橋士大野の一族元和二の春を山お花を春吉也了具足をかきりて新
風の叙式を著りて也す未看を前村中お花を春吉也了具足をかきりて新

あつちかかくくくくくくくくくく 清風

風の吹あくくくくくくくくくく 異水

溜池の枯芦

二田の用水は流亭のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
まこの使も云り作新のまこの使も云り作新のまこの使も云り作新

折も草や鴨の羽赤をよは流 墨水

芦の根は種の子より影をうけ 瀨路

田嶋橋の鶴 むらゝ但る香何葉とやん所おまわを飼せよと通流は

田嶋橋の鶴 むらゝ但る香何葉とやん所おまわを飼せよと通流は

回鶴崎の屋花 むらゝ但る香何葉とやん所おまわを飼せよと通流は

長者塔の雁 西域記云昔有比丘見双雁飞翔忽一雁投下自隕於是廢雁建塔云

鷹いらくあふおろく塔 中野谷泉寺の塔ハ長者何某造立今尚其夫婦の肖像を塔中小安セリ

初鷹や九輪 頼朝公和国戸山ハ在陣の時敵の軍勢をえりてまゝとて七まつり坂を

七曲の夕立 用をまゝとて上六崩山系ハ五川と流の流の屋舎は柏木を丸極むと

夕雨や あゝ小日のセツさうりや蟬

下道の紅葉 胸はき坂水神の迎序大衆下鼓の西垣より亭庭の月水道の小並園の上を

朝風 おまふまゝいかりの奥に加うたの道松をふまへり流屋居お六月雨像と見え

夕虹 えせの庵の碑も老建風羅堂景園造夜室の碑ハ紅蓮立を介旧法多

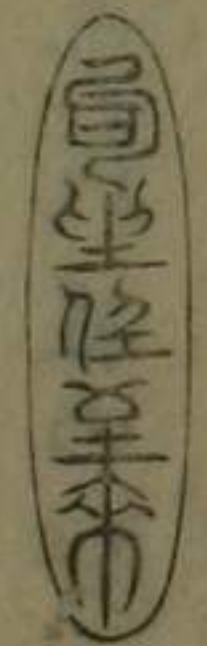
古今高田二十五景 畢

夜寒の里の礎

此地ハ橋山約法橋園口ハ赤坂の土一ノオウチハ井中亦旧地多新町築地多

松をまゝく 夜寒の奇ハ養蚕夜室と秋の歌ハふもまゝとてまゝとてまゝとてまゝとて

楓のふらと 倍之



珍々亭之碑

芭蕉翁

月よわく不時や 桃青

関獄より自ら雨降て山をまふわくともあり

旁志く 芭蕉山ハ時雨来まをえやう

一尾根ハ時雨来まをえやう

雪ふ 雪ふ

雪ふ 雪ふ

唐土に富士のついで後の月見勢よ
 啼千鳥不二をえ之と極見坂
 五月雨や婦の纏をその後も
 面白く富士は解遠く花路に如
 ぬり度で富士見ふふの下の向か
 名月や婦のしるるうと後河丁
 日頃より富士をちいさくその月
 笠取くやふふの岨のやうに
 年の花不二を合う深窓の那
 いさ書て暑さを忘もんぬの雪
 鳥や聲のついでも富士はゆき
 若き草やあか歌の山山乃山
 襟袖に着くぬ不そのま履式
 素堂
 杉風
 其角
 嵐雪
 桃隣
 素龍
 冬市
 紋水
 麋埒
 龜足
 素園
 露沾
 馬光

灌佛の富士の得をたのむま
 甲斐の歸路に吟
 初祖
 柳居

惟子や裏あるよの不二を
 題富峯の泰嶺
 二代
 白鬼園

解ぬ雪焚の念もぬや代々の春
 題京都愛宕山の士峯
 萬飾
 宗瑞

雲も入土器を鳥の峰りに山嶺
 富士晴く更ぬ山を山は且の南
 言外の情のり富士のそなた月
 八百里婦の峰より山尾花
 羊面の不二もその保を村志れ
 突連る杖の本に何や富士諸
 鏡平

○續十三景連富峯の吟
 素丸
 兼光
 五代
 宗瑞
 普門
 鏡平

面多し白雲や春の不尽
 富士を先く國あけり男あり
 裏不二や尾美と雪は力也
 石のき雲さうらふ不盡の春
 有明を最中一の月や後口富士
 富士と朝霞着うえ時鳥
 春の半は裾野小春雪の不二
 みあ月ややゆ生も乳着の衣久
 深中赤次第一山と鳥乃西
 日比ややゆ代あての山あ
 若菜や志保さか花の雪乃願
 懐り不二法とまり夏柳
 油深く小春の風やの毛

鬼堂
 泉山
 柳門
 宗周
 吐龍
 瀾関
 和山
 柳枝
 蘭車
 東里
 笠雨
 倍之
 清風

舞空り山高きわらも雲雀掛
 丸窓のゆや火燵の筑波山
 富士近う廣野小高末の穂
 雲の縁十月小不二とまらるる
 風のあやや夕日花照也
 迹より乃野末あ不二を深うを
 月花の侍の松而や雪は輝り
 山と青く裾野のゆ小春小
 出く見とて富士も雪解や田子の夕
 巴る春はあさきとや秋津虫
 あさき消し思ひのあや不の雲
 行富士と雲より埋て散さな
 雲の峰あけり朝の不盡

雪房
 律家
 義城
 五風
 三江
 元緒
 露有
 冬人
 異水
 盧夕
 墨水
 坐来
 滋蘭

富士見阪集之二

座傾仕到来

曹司谷人

後の事も志海もそと先小雪の富士

洞玄斎

壺と藤巻を在り以原

旭錦堂 花真

日小向ふ嶺や不肖此玉をそと

赤城 朱賀

新月や富峯に置るみつき砂

上野東金 普國

ふししの鷹きよきより月と不二

雑司谷 三壺

雪晴や江戸の最中もるたの裾

幌平

ふいすりやふしのついでをそと

冬入母 柳舎

秘事の裾分とそや好しのゆき

兼城妻 芦舟

落し鹿ささこの糸ねりの染う那

山幸母 如痴

菱鴻の道や居かゝる富士詣

山喜彦 少波

日の中此冬や好しの袖日影

其鏡

稚子も山の名同り不二の雪

蟠龍

鴨此をほそしやあそむ不二

田喜彦 護物

裏不そむ明て屋基乃風の上

中野連 松賀

梅きく色より高し雪の富士

氷水

あつしや夕日をいそぐよりの照

翫之

又角面の上み見もや雪のぬし

谷中 湛青

雪消ゆる下りや不二の土用干

保谷 可長

舞上鷹と仰くぬふしの所産

柳雨

晴くむら鷹多た不そ入日く

早産 一秋

涼しきや爰と高田の向ふ好し

嫡眠

風鈴の新堀り涼し夏の富士

里裕

不二の山見むじくあ坂此夕涼し

巢鳥

手鶴芝の雪ぬ老せぬ好し七産

甘ウシカヤ女 如柳

富士の峰へ山を賦し心志暮りしを

雪岨

暑き日や管釜さゆを富士見茶屋 春里

裾も又雲に峯あはる夏のぬ 其葉

ききくもや木ももて居て木のつら 李谷

あはるはゆゆ ハカあり花の系 牛長

朝不二や田舎のあはる カツカの系 桃江

ゆいあはる 南徳行川とふらん極やふ 専兵の雲

秋 里丸ゆい 観月ゆい 観月ゆい 観月

雲の華 観月あはる 観月ゆい 観月

あはる 九國府や鼻突合 九國府あはる 九國府ち山 九國府

富士ありて カツカ古来日の本 其玉は 其玉後 其玉ゆい 其玉

大雪や不二の根 日橋ゆい 南枝ゆい 南枝ゆい 南枝

日出扶桑海氣重晴天白雪芙蓉秀 太田覃

誰知五嶽三山外别有東方不二峯

蜀国 蜀山の 蜀山ち 蜀山ゆい 蜀山ゆい 蜀山

詠珍々亭富士和詩

名よおふふ 観月のふ 観月ゆい 観月ゆい 観月

月に 観月ゆい 観月ゆい 観月ゆい 観月

あはる 観月ゆい 観月ゆい 観月ゆい 観月

あはる 観月ゆい 観月ゆい 観月ゆい 観月

あはる 観月ゆい 観月ゆい 観月ゆい 観月

あはる 観月ゆい 観月ゆい 観月ゆい 観月

あはる 観月ゆい 観月ゆい 観月ゆい 観月

あはる 観月ゆい 観月ゆい 観月ゆい 観月

掬水菴

観月

幾代もそをぬ不二の影作く其まある正代のいしを
東院をそその影作く其まある正代のいしを

保谷 文阿
正盛

不盡見阪集 詩歌之部

道あけく富士の嶺もわくき右大将

晴るるもふ赤毛の帯に 頼朝卿

扶桑第一山 重此對孱顔 蕉中常

白雪初陽映 峻嶒霄漢間 蕉中常

云のその雲るらあけも禁あけく 養父

思の如くそく水晴く 養父

月有中秋花有春憑誰傳語落陽人 物茂卿

芙蓉白雪三冬色 今日看山也及辰 物茂卿

天津日の照せる四方の國中 小 洛伴 高蹊

いふくひをいふく山と不二の根 高蹊

去ふあそ雪も降もあそあそまき 曹司谷主人 果山堂

二日あそやあそあそまき 曹司谷主人 果山堂

誹諧歌

the names of the
Lords of the
the names of the
the names of the

the names of the

the names of the

